司馬遼太郎全集 1

梟の城
上方武士道

司馬遼太郎全集 第一巻
第十九回配本 梟の城
上方武士道
定価 一八〇〇円
昭和四十八年三月三十日第一刷
昭和五十六年十二月一日第五刷
著者 司馬遼太郎
発行者 杉村友一
発行所 株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話(代表)〇三―二六五―一二一一
印刷所 大日本印刷
製本所 大口製本
製函所 トーシキ
万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します
© RYOTARO SHIBA Printed in Japan

果の城
十方武士道

司馬遼太郎全集 1

文藝春秋

司馬遼太郎全集第一巻

梟の城　5
上方武士道　291
司馬遼太郎の世界　尾崎秀樹　567

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

装幀　三井永一
題字　中田　功
AD　粟屋　充

梟（ふくろう）の城

目次

おとぎ峠 9
濡れ大仏 33
白い法印 45
木さると五平 59
羅刹谷 70
忍び文字 78
聚楽 95
京の盗賊 108
甲賀ノ摩利 136
奇妙な事故 151
伊賀ノ山 167
吉野天人 177
水狗 189
修羅 203
五三ノ桐 225
甘南備山 251
尾行 258
石田屋敷 262
伏見城 269

おとぎ峠

伊賀の天は、西涯を山城国境い笠置の峰が支え、北涯を近江国境いの御斎峠がささえる。笠置に陽が入れば、きまって御斎峠の上に雲が湧いた。

天正十九年。——三月もあと数日しかあまさない。落ちなずむ陽が近江の空を鮮々と染めはじめたその夕、茜雲の下の峠みちを、這うようにしてのぼってゆく老人があった。

農夫のような粗服をまとい、七尺ばかりの黒木の杖にすがっている。杖のほうが、むしろ老人を載せているようにみえたのは、老人が驚くほど小造りだったせいかもしれない。

長い影が、老人のうしろに続いた。杖は影を載せ、漕ぐようにほそい坂道をのぼってゆく。登りつめれば、道はそのまま甲賀の山々へ通ずるはずであった。

ふと老人は杖をとめた。人の気配がした。やがて老人の影をふんで、樵人がすれちがおうとした。

「これ」

ふりむいた樵人の顔に、小さな恐怖がうかんだ。老人の容貌が、あまりにもすさまじかったからである。右目と鼻がつぶれ、古い火傷の痕が顔一面に這い、小柄で切りさいたような唇から欠けた歯がのぞいている。歯が老猿のようにわらった。

「当薬が生えている」

「え？」

「その足もと。干して、胃の薬にせぬか」

「……」

「せぬか」

男はあわてて道端の青い草を二、三本抜きとったが、老人の親切がわかると急に安堵したらしく、

「お前様は、どちらから」

「わしか。東じゃ」

「東……」

「下柘植」

「あ。次郎左衛門さまか」

「知っておるのか。これは是非もないな」

老人は歯をむいて苦笑した。過ぐる天正九年、これは後述するが、伊賀ノ乱で信長の軍勢を悩ました下柘植次郎左衛門の名を、この国中で知らぬ者はない。

「ところで——」

老人は、杖の根もとにうずくまると、

「このあたりに、庵があるはずじゃな」

「葛籠さまの？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「ほう、これまた抜け目のない。いかにもその重蔵」
老人の目に、ちらりと警戒の色が動いた。敏感に樵人の目に反射して、先刻の恐怖がよみがえったらしく、
「さ、重蔵さまの庵なら、このかみ手に大きな百年松がある。松から東へは、道がない。草をわけて、一丁も行きなされ」
「なるほど。重蔵は、毎日なにをしておる」
「知らぬ」
いうなり、樵人は逃げるように坂を駈けおりた。

小さな崖があった。
崖の上に、樵人の教えた百年松が根をはっている。
老人は、しばらく崖を仰いでいたが、やがて杖をとりなおすと、道端に支点をつくって、ふわりと大気の中に浮いた。ひらひら空を舞いつつ崖の上に降り、下草のうえを、けもののように走った。
楢があり、樫がある。ほどなく森がおわって、小さな原がひらける。
庵がたっていた。
軒こそ傾いているが、建物はさまで小さくはない。辻堂に似ている。
急にあたりが、淡紅の光に満ちた。西の空に、落日がようやくきわまりはじめたのであろう。霞靄の粒に光が宿り、紅雲が降りてあたかも庵を包むようにみえた。

老人は、原のふちに立って、じっと庵をみつめている。むろん、景観を楽しんでいる風情ではない。
やがて、紅雲の中から鉦がひびき、低い日没偈の声が洩れはじめた。老人が訪ねる、葛籠重蔵であろうか。
一方、老人は誦経がはじまると草の中で奇妙な身ぶりをはじめた。
ひらひら、上体のみを舞わしている。
動きは、高音にさしかかるにつれて激しくなり、低音へくだると次第に弱まる。相手の呼吸を、自分の生理のリズムにあまさず写しとろうとするのであろう。……しかしそのまま、老人の足は休まず庵に近づいていた。
ふわりと、濡れ縁に布ぎれが置かれたように、老人の身が縁に這った。
日没偈は、つづいている。
老人は、しずかに明り障子をあけた。
部屋がみえた。
西面して、厨子があった。前に鉦があり、香炉がある。
しかし、人がいなかった。
日没偈はつづいている。
声のみがひとり、部屋の中央の無人の円座から立ち昇っているようであった。
老人は、急に笑いだした。
「重蔵。もうよかろう」
「……」

「なんと、用心のよいこと」
「……」
「出い。この前へ」
「お師匠か」
「念にはおよばぬ。先刻から判っておろう」
「何しに、みえた」
「なぜ、身を隠す」
「もはや世を捨てたつもりでいても、気配をかげば体のほうが悟りきれぬ。気がつけば、自然、梁に手足がはりついて居申したわ」
「あはは、それはかえって当方の重畳。乱波の生悟りはざれ絵にもならぬ。今日は、なまじ覚者にもなれそうにないわれを見込んで、よんどころない頼みをもってきた。まず、これへ寄らぬか」

「……」
音もなく、いっぴきの蜘蛛が糸をひくように、屋根ぐみの梁から人が落ちてきた。
三十四、五。肩の肉が厚い。乱波といわれるにしては、めずらしく上背があった。
「重蔵。変わらぬな」
「お師匠も、お変わりなく」
沙弥らしい生活はしているが、髪はおろさず、蓬髪を無造作にうしろで束ねている。赫黒い顔に微笑を浮かべて座るのを、老人は待ちかねたように気ぜわしく相手の膝を指でつき、
「風間五平が死んだ」
「なんと」
「あるいは、裏切りおったのかもしれぬ」
「……」
「ともかく、伊賀で忍びにふさわしい男の種が絶えた」
「風間五平といえば、姫どの」
「ふむ。許婚者になっておる」
「ご落胆でござろう」
「わしか」
「姫ども」
「木猿か。あいつの心底、この男親にはわからぬ。風間の消息をたずねにゆくと申している。死がたしかなればよし、もし風間五平が伊賀を裏切ったとあれば、この手で刺す、という。……あれが男ならばな」
「……」
「よい伊賀者になっていたであろう」
「しかし女であのお気象は不幸の種になろう。お師匠も、不仕合せな父親じゃ」
「考えてもみよ、伊賀ノ乱で郎党は四散した。その上、われとただ二人の弟子のうちの一人までもこの始末になっている。――重蔵、何処へゆく」
「灯りをいれ申そう」

「要らぬこと。わしの目に夜昼はない。われは、目が鈍ったか」
「あは、十年も仏いじりをしていてはな。お師匠が要らぬといっても、わしには要る」
重蔵は、闇の中に立った。
その後ろ姿を見きわめると、[illegible]人はすばやく板敷のうえを辷って厨子に近づき、扉をひらいて手を入れた。そのひようしに、闇の向うから重蔵の哄笑がわいて、
「そこにはない」
「……」
「念持仏はわが懐ろにおわす。捨てようとされたか」
「当り前。忍者に仏いじりは要らぬ」
「察していた。お師匠がこの庵の庭先に立たれたときから、胸にきている。お師匠、わしは」
「聴かぬ。忍びにもどれ」
「それほどの仕事があるのか」
「ある。風間の仕事を継げ。もはや、伊賀にあってはこれほどの仕事をやれる忍者はわれを措いてない」
急にあたりの闇を払って、燭台の暈光が近づいた。重蔵は座にもどると、
「で、風間は？」
「京にいた。わしが命じた仕事をやっていたのが二年。消息が杜絶えて半年。――飛脚をなんども遣ったが、いずれも空しかった」

老人は、急に口をつぐんで身をよじらせた。しばらく懐ろを手探っていたが、やがて小さな麻袋をとりだし、対座している相手を置き忘れたかのような、依怙地な作業に没念しはじめた。小さな石を袋の中からつまみだしては、掌の上に並べてゆく。石は、陰湿な黒味を帯びていた。むしろぶきみに濡れ、そのうちのひとつが、急に動いた。とみる間、他の石もぴくぴく動きはじめ、たちまち石のすべてが弾けるように掌の上で踊った。蛭であった。
「ひどく、凝る」
呟くと、頸を長く前へつきだした。目を閉じている。それは、老残の肉食鳥が岩角を摑んで天の風に耐えている姿にも似ていた。伸びた頸すじに、一つ一つの蛭をつまんでは、たんねんに載せてゆくのである。
刻限は、すでに酉ノ下刻（午後七時）を過ぎていよう。山が雨気を催しはじめたらしく、障子の外でしきりと樹が騒いだ。
蛭は、老人の頸すじで次第に肥えた。やがて血玉になり、血を滴らせて雨だれのように落ちてゆくのを、葛籠重蔵は、灯りの影でもくねんと眺めていた。
眺めながら、この老人の血管の中に、まだ他の生きものに吸わせるだけの血が残っていたことを奇妙に思った。
それほどに、老人は痩せてもいた。またそれほどに、こ

の下柘植次郎左衛門は、忍びにつながるわが身の利益のためには、たとえそれが伊賀地侍のならいとはいえ、他のいかなるものも犠牲にして省みぬ酷薄な半生に生きてきた。

寿永四年、壇ノ浦で敗走した平家の将のうちで、伊賀平左衛門尉家長というものがあった。源氏の世となってのちは、一族は伊賀盆地のすみずみにかくれ、自ら耕して辛うじて暮らしをたてる零細な郷士におちた。

このうち、服部ノ庄に住んでその地名を名乗った者の集団を服部党といい、柘植に住んで地名を名乗った者を柘植党という。下柘植次郎左衛門はその一族のひとりであり、他にもいくつか、平姓をもつ小集団が山々谷々に割拠した。

伊賀は、古来、隠し国といわれる。

たかだか四六〇方キロにすぎぬ小盆地を、山城、大和、伊勢、近江の四カ国の山がとりまき、七つの山越え道が、わずかに外界へ通じている。

近江の甲賀へ通ずる口を御斎峠、山城へは笠置峠、伊勢へは加太越、長野峠。これらは、すべて日本の表通りへ通じ、この口を扼せば伊賀は権力の視界から消えた。

権力といえば、京から発し琵琶湖東岸を通り、岐阜、駿河、小田原、鎌倉、江戸へ通じた交通路はそのまま日本史における権力争奪の往還路でもあった。

伊賀は、その権力の幹線と背中合せになり、しかも京へはわずか八〇キロ。権力が崩壊してゆく音も、権力が勃興してゆく音も、わずか襖一重でききつつ、この国の郷士たちは孤独な自分の日を愉しむことができた。

彼らの中で、忍びの術が発達したのも無理はなかったのである。

京で一つの権力が崩壊するとき多くの落ち武者が、この間道国へ逃げた。

寿永のころはおびただしい木曾武者が落ちてきたし、関ケ原で敗走した島津勢も、この国を通って堺へ出た。

天正十年六月、本能寺ノ変をきいた家康は、わずかな手兵とともに堺にいた。本国三河に帰るためには、大坂、京、近江の道をとれば好んで叛軍の顎に投ずるようなものであったろう。秘かに間道を伝って伊賀御斎峠に入り、柘植川に沿って加太越を越え、伊勢の白子から海上にのがれた。義経の場合は、この隠し国を積極的な兵略に用いた。京の木曾軍は、鎌倉を発向した義経の部隊が伊勢に出没したあたりから索敵情報をうしなった。義経は殊更に湖岸路を選ばず、部隊を伊賀に入れて足跡をくらましたのを知らなかった。のち忽然と山城平野へ出て木曾軍を討滅したが、この隠し国が日本史で果たした役割は、ふしぎとも玄妙ともつかない。

自然、隠し国に棲む郷士たちは玄妙な個性を備えはじめた。畿内に住みながら、勃興してくる権力に驥尾して栄達することを毫末も考えなかったのは、滅亡のはかなさをその目で見つづけてきたからであろう。

かれらの多くは、ふしぎな虚無主義をそなえていた。他国の領主に雇われはしたが、食禄によって抱えられることをしなかった。その雇い主さえ選ばなかった。報酬をくれる者ならいかなる者の側にもつき、仕事が終わると、その敵側にさえついた。今日の権勢が、直ちに滅亡につながることを、世襲の本能で知りつくしていたからである。

かれらは、権力を侮蔑し、その権力に自分の人生と運命を捧げきる武士の忠義を軽蔑した。諸国の武士は、伊賀郷士の無節操を卑しんだが、伊賀の者は、逆に武士たちの精神の浅さを嗤う。伊賀郷士にあっては、おのれの習熟した職能に生きることを、人生とすべての道徳の支軸においていた。おのれの職能にのみ生きることが忠義などとはくらべものにならぬほどいかに凜烈たる気力を要し、いかに清潔な精神を必要とするものであるかを、かれらは知りつくしていた。

職能とは、云うをまたない。忍びであり、偸盗術であり、測隠術であった。伊賀郷士たちはこの術を下人に学ばせて間諜、謀略の仕事を請け負った。伊乱記という古書に、こうみえている。

「不断未明より午ノ刻までは士農工商各家業の所作を励し午ノ刻より暮まではひたすら武法弓鳥の道を磨き別して測隠術を鍛練す。

上代より伊賀の遺風として其の古への御色多由也より諜術を伝へて、楯岡ノ道順、伊賀太郎兵衛、高山次郎太郎、小串、大串、城戸なんどと言へる名器のもの国中に充満して其の流今に至るまでしのびの通力を伝へ如何なる堅城要害と雖も忍び入らずといふことなし。他国にても伊賀忍とてこれを重宝せり」

鎌倉幕府が亡んで戦国末期にいたるまでのあいだ、伊賀には国守がなかった。右のような伊賀郷士たちが、伊賀連判状と称する同盟の掟をつくり、「他国他郡より乱入の族これあらば表裏なく一味仕り妨げ申すべき事。郡内の者、他国他郡の人数を引入れ、自他の跡望む輩これあらば、親子兄弟によらず惣郡同心成敗仕り候べき事」などと、一国をかれら協同の成敗の下においていたからである。

この組織に壊滅の打撃をあたえたのは織田信長であった。

天正五年の初頭、信長は自ら軍を率いて紀州雑賀を征した。引き続き、柴田勝家をして加賀、羽柴秀吉をして播磨、さらに翌年には明智光秀をして丹波を略せしめた。

信長の子で伊勢の北畠氏をついだ信雄の指揮下にある織田・北畠の混成部隊が隣国伊賀掃討の緒についたのも、このころであった。しかしその緒戦は惨澹たる敗北に終わった。

織田信雄が伊賀征服の拠点ともいうべき丸山城を神戸の山谷に築いているとき、早くも企図を察した伊賀地侍が、つぎつぎと回章をまわして強固な連合組織を作りあげてしまったのである。

このとき、竜口の百地党より参加した名張郷の郷士葛籠

重蔵は二十歳、柘植党から参加した下柘植在住下柘植次郎左衛門は四十二歳、いずれも屈強の働きざかりであったろうと思われる。

柘植清広という者が頭取となり、郷士雑人をあわせた伊賀軍は七百人。

当然、これは全軍が奇襲隊であったろう。

なかでも火術・謀術にたけた百名の者が選抜され、野戦隊と区別するために忍び組と名付けられた。ほぼ二十組にわけ、それぞれ郷士を組長とし、下忍を組下に入れた。下忍のほとんどは、姓もろくにない。たとえば上野ノヒダリ、神戸ノ小なん、音羽ノ城戸、柘植ノ小耳、といったあだながついている。士分ではなかったが、後世多くの伝説をつくった忍術の達人は彼等のなかから出た。

次郎左衛門、重蔵、さらに風間五平らは、これら下忍を指揮している。

そして百人の忍者を指揮する者は、楯岡ノ道順。

おそらく、忍者が、他に雇われることなく自らの防衛のためにしかもこれほど大規模で戦った例は史上最初で最後であったにちがいない。

丸山城は、山を背負っている。

両翼の地を、伊賀川の本流と支流が複雑な地形に削って流れていた。

その夜、四更(二時)を過ぎたころ、盆地のあらゆる在所からあつまってきた伊賀勢が、東方の山地に集結し、静かに風のように城をとりかこんだ。

草のかげ、樹の梢、岩のくぼみ、城外のあらゆる地物が、死神のように息づきはじめた。

城の鎮将は、滝川勝雄、その麾下のたれもが、自分が包囲されつつあることを気付かなかった。

おそらく、これほど静かな攻城戦も、戦史の上でなかったにちがいない。

真夏ではあったが、寅ノ刻をすぎると、さすが伊賀川の瀬からたちのぼる霧は、蕭殺たる冷気を帯びはじめた。そのころおい、ほそい、糸のような月が西の山の端へ落ちた。

月の落ちるとともに、攻囲軍の四方から、黒い瘴気のようなものが、草の上に起こった。忍び組であった。

百人二十組の忍びが、搦手から、城戸から、櫓の蔭から、まるで吸われるように城内へはいってゆく。

「黒阿弥」

城南の渓流から岸を登って城の搦手に出た葛籠重蔵は、下忍の耳もとに口を寄せた。黒阿弥とよばれた男は、身をよじらせて、釣り梯子を背からおろし、草の根に顔をつけながら進む。草に触れて、虫の声がやんだ。代わって、黒阿弥をとりまく他の下忍の歯から、虫の擬声が洩れた。

城戸の内に、あかあかとかがりが燃えている。火のそばの城壁へのぼった黒阿弥は、まるで瓦に化したように貼りついて動かなくなった。目の下に、数人の番士の頭がみえ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com